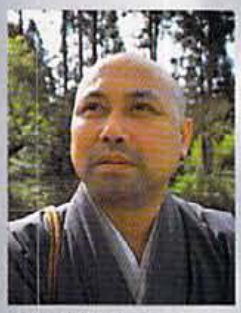
未知へ向かう標（しるべ）

第五十二弾 ～七〇年代の想い出・修学院室町の一年～

一九七〇年代の中頃、ひとりの大学生が修学院室町で過ごした一年間。散策を繰り返し考えつづけた彼の心の風景……



寺前浄因氏プロフィール
一九五七年生まれ。和歌山県和歌山市出身。同志社大学工学部を中退。信州大学文学部哲学科卒業。信州大学時代、松本市内の禅寺に学ぶ機会を得て以来、禅宗での修業生活に関心を寄せる。一度、東京でのサラリーマン生活を体験した後、禅宗での修業生活に入ることを決意。京都・南禅寺、建仁寺を経て、現在、高台寺副執事・岡林院住職。

文／三村　渓・写真／大田　メグミ

数学で身を立てようと思った。だが、それにはすでに年齢が過ぎていることに気づいた。十九歳の春である。

同志社大学では工学部に在籍した。悩んだ末、教授や友人に相談してみた。自分は哲学科で学んだほうがよくはないのだろうか？そんなことをときどき考えるようになっていた。

和歌山から京都へ出た折は、御所のちかくで下宿した。だが街の喧騒が肌にあわず、修学院室町に居を変えた。毎日のように散歩へでかけるようになったのは、それからのことだ。離宮の正門から蓮華院あたりを抜けてゆくと、京の街は遠い青空のもとにある。風が吹けば田畑のはずれで竹がさわぎ、森の木々は静寂の音を秘めて佇立した。

知らずに、口許が微笑んでいた。

山の麓あたり、からりころりと下駄を鳴らして音羽川のほとりにむかう。そして太陽を背に、ただ一日をすごすこともあった。雲の流れや、水の流れを飽かず眺める間に、大学を卒業してサラリーマンとなった自分の姿を想像した。なぜか、その姿が日毎に希薄になってゆくことに気づきながら。

「今を、どう生きるか……未来の自分を幸福にするために、現在をどう生きればよいか。そのことについて人は誰もが雄弁なんですね。でも今をどう生きるかで、未来をどのように変えてゆくことができるのか。そのことについては……歩きながら、頭の中で僕は今をどう生きればよいのだろう？と考えつづけていました」

日が暮れると友人たちの溜り場へと出かける。田中里の前町のYという店がいつもの場所だった。ジュークボックスでは、デビューしたばかりの岩崎宏美が「二重唱（デュエット）」を歌っている。当時はフォークソングが隆盛で、井上陽水の『傘がない』や、かぐや姫の『神田川』も定番だった。さだまさしは、グレープで『精霊流し』を歌っていた。

サントリーのダルマを傾けながら、友人たちとそれぞれに詩集や愛読書をもちよって"生き方"を議論した。青白い自意識を削り取ってゆくように、夜が更けるまで『おまえはそう言うが、俺は……』

『いや、俺のいうことは……』

話がとぎれることもなかった。やがて時間の経過とともに、その内容が生き方から"女の子"へとかわってゆくことも、いつものことだった。

かくとだに
いわはいぶきの　さしもぐさ
さしもしらじな　もゆるおもいを

小倉百人一首の歌を挙げては、それを例に"手紙"に書く一節をさまざまにみなで検討？した。理系・文系を問わず受験勉強で学習した古典の知識には共通するところがたくさんあった。そんな記憶にうまくアタると大いに盛り上がるのが常だった。彼女に宛てる手紙の文面はそうやって吟味した傑作だったが、想いがどこまで通じたのかは、定かでない。

ダルマが三本も空になると、宴もおひらきとなる。黎明の空から射す閃光をうけて白川通りは夏の静寂にあった。からん、ころんと下駄を鳴らしながら、そのとき何を考えていたかは、もう覚えていない。

それからも散歩はつづいた。

道すがら、はじめは軽く会釈を交わす程度だった人々とも、ときに話込むことが多くなった。

「お茶でも飲んでいかへんか」

誘われるままに農家の縁側に座って、小さいころ育った和歌山の町のことや、散歩して感じたあたりの光景について語った。今、自分が悩んでいることについても率直に打ち明けた。彼を迎えた老爺や老婆は、黙ってそんな話を聞いてくれた。いつのまにか田圃の稲穂がきいろく色づき、柿の実に朱がさす季節が訪れていた。

歩きながら、さまざまな詩が自然に浮かんできた。風景は瞳の中に映った瞬間、その時々の感情の動きによってさまざまに変換され、かたちをかえた。

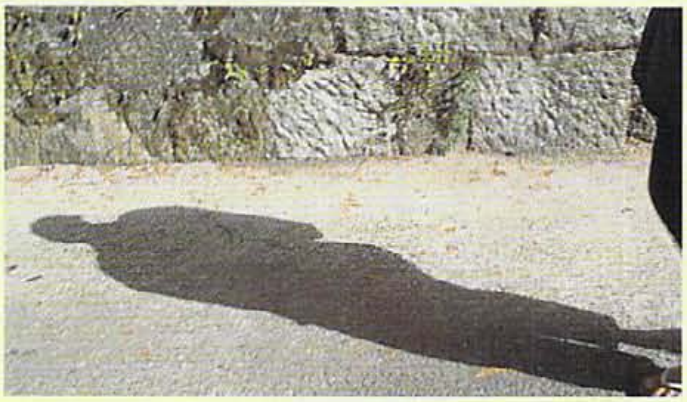
云うものは水に描き
聴くものは石にきざむ

音羽川。当時とはずいぶんかわっているそうだ。

離宮の正門から
蔓珠院あたりを抜けてゆくと、
京の街は遠い青空のもとにある。
風が吹けば
田畑のはずれで竹がさわぎ、
森の木々は
静寂の音を秘めて佇立していた。

これは、修学院離宮の正門。

蔓珠院正門の石段で。当時も、こうして腰かけては休憩した。



そんなことを考えていたのを覚えています よ」

そして、ふたたび下宿に帰り、決意した。

季節は冬だったが、そのときの心境はきっと次の詩のようなものであったのだろうか。

蛾眉山月　半輪の秋
影は平羌江の水に入りて流れる
夜に清渓を発して三峡に向かう
君を思えども見えず　渝州に下る

―李白「蛾眉山月歌」―

今から十八年前、中国の古詩が好きだったひとりの青年は、そうして修学院を後にした。同志社大学を中退、信州大学に学んだ彼は、その後、僧形となってふたたび京にもどることになる。もちろん当時の彼は、そんな"未来"を知る由もない。

「どういうわけか、友人が語ったこの言葉が心の中で反芻されていました。今をどう生きればよいのか。自分は今、何をすればよいのか。なんとなく結論めいたものは見えていたのですが、決断することはできないままでした。そんなときでも、ふっとこの言葉が浮かんでくるのです」

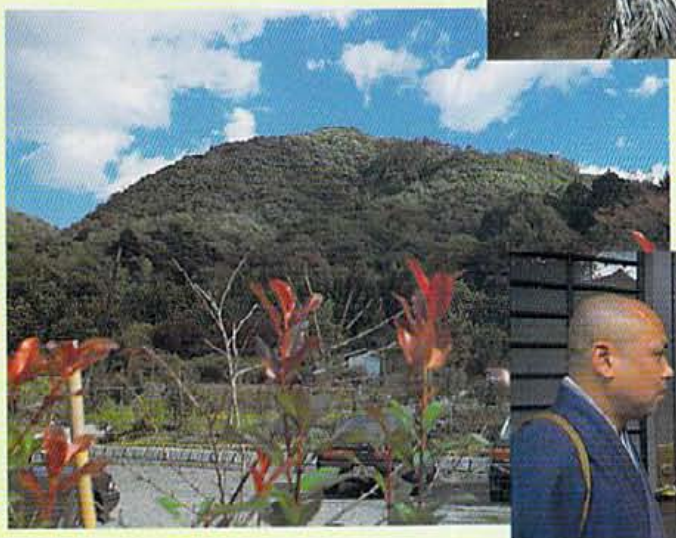
蓮珠院の紅葉も終わりを告げ、雪がやって来た。

下宿の窓をがらり、と開ける。ベッドの上であぐらを組み、頭から蒲団を被った。ラジオカセットからはヴィバルディの四季・冬の第二楽章が流れている。刺すような空気の中で、コップ酒をちびりちびりと飲みながらいつまでも雪景色を眺めつづけた。

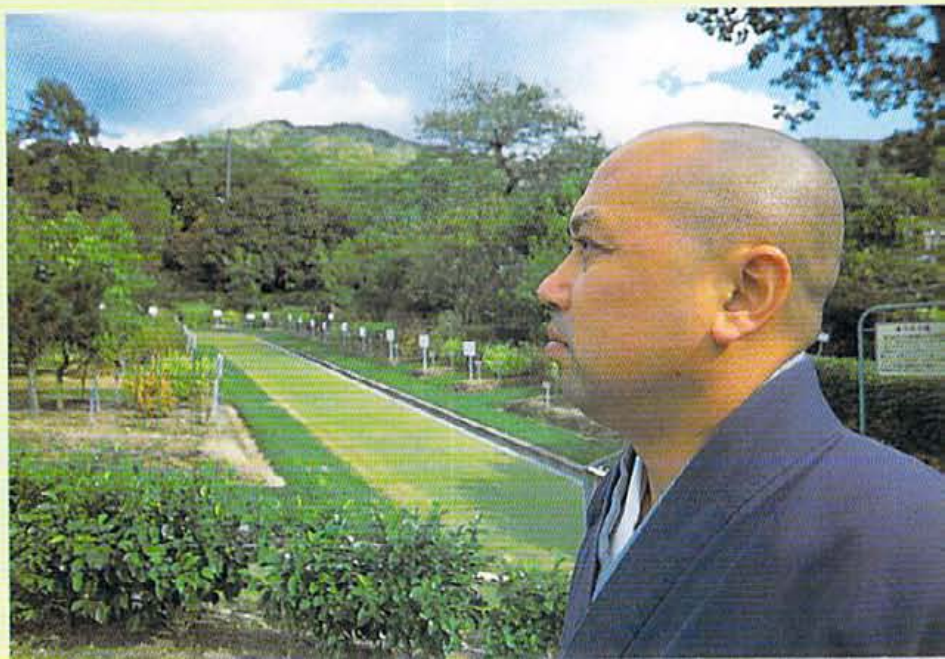
心の中で、何かが動く。

傘をもち、外へ出かけた。頭の中では、まだ音楽が響きつづけている。深閑とした白い風景の中で、その響きは外から聞こえてくるようにも感じられる。ふと山の稜線をみあげると、ぱっ、と雪煙りがあがっていた。一瞬の間をおいて、ざっ、と幽かな音がする。それは、不思議な間隔をあけて起こり、目を惹きつけた。

「今、僕の横に好きな女の子がいれば、彼女にこの光景をどう説明しているのだろうか……？音羽川のほとりまで来たとき、



当時の下宿を訪れた。建物は新築されてしまったが、おばさんは昔のままだ。



京都の恵まれた
自然と伝統が
またひとつ謳い出した。

鳥居野（白）フルボディ・中口 720mℓ
鳥居野（赤）フルボディ・辛口 720mℓ
いずれも消費税込・希望小売価格 2,000円

LIEBE GEHT DURCH DEN MAGEN
Tamba Wine
丹波ワイン®

〒622-02 京都府船井郡丹波町豊田鳥居野96番
TEL.0771-82-2002　FAX.0771-82-1506

ワインは20歳になってから。